

乗雲

寺報

第113号

1985年4月創刊

R3.5.1 発行

〒959-2646 新潟県
胎内市西栄町2-8
TEL0254-43-2419
FAX0254-43-4560

編集人
広厳寺
住職 神田英俊

メール
otera@kogonji.jp

一日作さざれば一日食らわず

百丈懐海禅師

インドではお釈迦様の教えを受けた出家修行者は田畑を耕す等の労働は一切せず、生きていく上での大切な食べ物は托鉢によって信者よりの施しを受けて生活をしていました。インドから中国へ仏教が伝わると、達磨大師によって禅の教えが伝えられ、その後六祖慧能禅師、馬祖道一禅師、百丈懐海禅師によって更に広まり、修行生活の規範等も作られることになりました。この時代になると修行者も増え、托鉢だけでは食料調達がままならなくなり、自ら田畑を耕し食物を得るという労働を行うようになりました。これはただ単に空腹を満たすというだけではなく、人々の心も耕す大切な修行であるとされ、後に禅宗ではこの諸々の労働を「作務」と言って重んじることとなります。本山に於いても「作務」は大事な修行の一つとし怠りなく務めています。

百丈禅師は高齢になっても作務を欠かすことがなかったため、若い僧が禅師の身体を心配する余り、作務の道具を隠してしまいました。そのことにより禅師は「徳を積む修行もできないなら、食べることも一切止める」として、自らを戒める思いでこの「一日作さざれば一日食らわず」という言葉を残された。

今から四十数年前、大本山永平寺に修行中、縁あって金沢大乘寺に起



中央 大島恭龍老師

居することがあり、当時は永平寺の監院職であった大島恭龍老師が住職をしており、朝の勤行、小食が終ると必ず修行僧と共に箒を持ち、

雑巾掛け、日中作務と大衆に範を示してくだされたことを思い出す。老師は「作務は徳を積む修行なり」を日々実践しておられた。

道元禅師の弟子である懐契禅師が著した正法眼蔵随聞記には、「人は必ず陰徳を修すべし」「必ず冥加顯益あるなり」と道元禅師の言葉を説かれていた。「陰徳」とは人知れず密かに行う善行のことであり、陰での修行を大切にせよとの教えです。そのことよって「冥加顯益あるなり」自ずと生まれながらに備わっている人徳が表れてくるというもの。又六祖慧能禅師の後の洞山良价禅師には、「潜行密用は愚の如く魯の如し」の語がある。人の見ていない誰も気づかないところで、愚かなことと言われようが黙々と善行に励む、ただ精一杯の行いをする。これも道元禅師の「陰徳を修すべし」に通じる行為です。誰も見ていないところでの行いはいよいよ加減になりがちですが、これこそが人間としてなすべきこと、人生を生きていく上で大事にしなければならぬ大切な行いです。「一日作さざれば一日食らわず」そんな気概を持って仏道成就を願ひ、毎日の生活の中で陰徳を積む修行を心がけましょう。

令和三年 年回忌表

〔回忌〕	〔没年〕
一周忌	令和二年
三回忌	平成三十一年 令和元年
七回忌	平成二十七年
十三回忌	平成二十一年
十七回忌	平成十七年
二十三回忌	平成十一年
二十七回忌	平成七年
三十三回忌	昭和六十四年 平成元年
五十回忌	昭和四十七年
百回忌	大正十一年

▼令和三年(2021)度の年回忌表です。当寺では個人情報保護の観点から本堂には張り出ししていません。正各家には昨年十一月中旬に通知していますのでご確認ください。▼日曜・祝日のご法事の申し込みはお早めにお問い合わせください。▼「周」は「めぐる」ことを意味する言葉で、亡くなってからちょうど一めぐりした翌年のその日を一周忌と呼ぶ。回忌とは亡くなられた日を最初の忌日と考えて、三回目の忌日が「三回忌」となる。以降は丸六年目が七回忌、丸十二年目が十三回忌となる。